

植物と人々；

南アジアの園芸に関わる諸カースト巡り③

インド・ビハール州ガヤー県の野菜カースト

大橋 正明(国際社会学科)

1. はじめに

インドのカースト制度は、外からは固定して変動のないものに見えるが、実は複雑で変化するものである。その区分や序列は人によって解釈が大きく異なるし、様々な要因で変動し、時代や地域によって異なった姿を示す。

この連載の前回の末尾で、筆者は「野菜造りカースト¹出身のニティーシュ・クマールがビハール州首相²の座に就いた」と述べた。それゆえ今回は、野菜の生産を主な職業とし、主に北インドのビハール (Bihar) 州の農村部に居住する7百万人ほど³のコーイリー (Koiri) というカーストを取り上げることにした。

調査を進めていくうちに、ニティーシュ・クマール州首相はコーイリーではなく、農業を主な生業とするクルミー (Kurmi)・カーストの一員であることが判明した。クルミーは、カースト序列でコーイリーより上位に位置し、コー

-
- 1 カースト:本論では特に断りがない限り、バラモン・クシャトリヤ・ヴァイシヤ・シュードラとその枠外の被差別カーストで知られるヴァルナ (Varna) ではなく、主に伝統的な職業を元に細分化した2〜3千に上るジャーティ (Jati) を指す。
 - 2 州首相:インドは28の州と7つの連邦管理地区による連邦共和国で、各州に州議会と州政府があり、州の首相が率いている。首都デリーにはインド中央政府があり、強い権限を保有している。
 - 3 カースト所属は、近年の国勢調査(Census)では調査されないので、正確な数は不明。キリスト教布教を目的としたと思われるJoshua ProjectのHPは、ビハールを中心に6,693,186人から、ネパールとバングラデシュを含めて7,551,000人としている。<http://www.joshuaproject.net/peopctry.php?rop3=112604&rog3=IN>

イリーより人口が多く、ビハール州ナーランダー (Nalanda)⁴ 県を中心に北インドのより広い範囲に住み、政治家、ビジネスマン、エンジニア、医師、官僚などとして活躍する人が多く、社会経済的にコーイリーより恵まれていることが多い、とされている。

しかし筆者が前回、クマール州首相を野菜づくりカーストの一員であると誤解したのは、それなりの理由がある。このコーイリーとクルミーという二つは、一部の人の理解によると、同じカーストの内部に複数存在するサブカースト⁵の関係であるからだ。さらにこの二つは緊密な関係であるという本人たちのキャンペーンも、ここ10年間余り盛んであった。

本論ではまずは、こうした複雑なカースト事情を説明し、続いて2009年3月末にビハール州南部のガヤー県で行ったフィールド調査の結果をもとに、野菜カーストの仕事や生活について報告する。

2. 複雑なカースト制度

2-1. 議会制民主主義がカーストに与える影響

コーイリーとクルミーが緊密だというキャンペーンは、ヒンドゥー教徒ならよく知っているラブ・クーシュ (Lav-Kush⁶) という名前では呼ばれている。この二つのカーストの関係を、インドの大叙事詩ラーマヤナという神話の、主人公ラーマとその妻シーターの双子の息子になぞらえたものだ。

このキャンペーンによって、この二つのカーストの人々の多くが結束し、2005年に行われたビハール州議会選挙で、ニティーシュ・クマールと彼が率いるJD(U)(Janta Dal (United)=人民党統一派)の初勝利に大きく貢献した⁷。なぜ州議会選挙のために、この一体化が必要だったのか？ここでビハール州とそのカースト、そして政治の状況を概観しよう。

4 ナーランダーは、仏教研究の中心として5～12世紀に栄えた寺院遺跡で有名。ビハール州の州都パトナーの南東約90kmに位置する。

5 サブカースト:本論では、一つのジャーティ内に複数存在する伝統的な内婚集団を指す。このサブカースト間にも上下階層関係が存在する。現在ではサブカーストの内婚規制は薄れ、カースト内あるいは特定の他のサブカーストと婚姻も見られる。

6 クーシュ (Khus) は、インドではヒンドゥー教の先祖供養の儀式の際に使われる水草(学名: *Poa cynosuroides* Retzius)の名前に由来する。

ビハール州は、北海道を一回り大きくした程の面積だが、人口がベトナムとほぼ同数の8300万人⁸なので、一つの国と言ってもよい。一人当たりの州内総生産はインド最下位⁹、成人識字率も男女ともインド最低でそれぞれ60%と33%。つまり経済的にも社会的にも、インドで最も開発が遅れている地域である。

この州の人口のうち、12.7%が畜産、牛飼いを主な生業とするヤーダヴ・カースト、16.5%がイスラーム教徒である¹⁰。この二つの集団の意向が、ビハール州の政治動向を決めると言われている¹¹。実際1990年からこの2005年までのビハール州は、ヤーダヴ・カーストの一員ラルー・ヤーダヴ(Lalu Yadav Prasad)と、彼のRJD(Rashtriya Janata Dal=民族人民党)が一貫して政権を担当していた。彼の長期政権は、この二つの集団に加えて、州人口の14.6%を占める最下層の指定カースト¹²の票が支えていたと考えられている。しかしこの間に、この政権の腐敗や能力不足が明らかになる一方、ほぼ同じ支持基盤を持つ他の地方政党が台頭してきた。

ヤーダヴもコーイリーもクルミーも、カースト序列としては指定カーストより上に位置するものの、バラモン・クシャトリヤ・ヴァイシヤに属する上位カーストと比較すると社会経済的に遅れているため、指定カーストに準ずる

-
- 7 例えば2007年10月7日のThe Tribune online edition(<http://www.tribuneindia.com/2007/20071004/nation.htm#10>) には、“Lav-Kush”, that was believed to have played an important role in supporting Nitish Kumar to ground Lalu Prasad in 2005 assembly polls. と述べられている。
- 8 人口の出典はCensus 2001
- 9 最近の統計によると、インドの一人当たりGDPは25,825ルピーだが、ビハール州はその四分の一以下の6,776ルピー。識字率を含めた統計は”Indian States at a Glance 2006-2007”(Indicus Analytics Pvt. Ltd.)を自治体国際化協会、「インドの地方自治」(<http://www.clair.or.jp/j/forum/series/pdf/27.pdf>)より孫引きしたもの
- 10 これらの人口割合の出典は、次の注10と同じ
- 11 このことは広く指摘されているが、例えば吉野宏、「インド最新事情（連載）第2回～鉄道は国家なり～」、鉄道車両輸出組合報 No.236、2008 3/4 (<http://www.jorsa.or.jp/jp/kumiai/data/236/236p42.pdf>)のp.44を参照。
- 12 指定カースト(Scheduled Castes)は、不可触民、ハリジャン、ダリットなどとも呼ばれる集団とほぼ同じで、謂れのない「穢れ」を理由に最も激しい差別を受けてきた人々。インドの人口の約16%(ガヤー県は30.0%)を占める。政府の優遇策を受ける「指定」を受けたカーストという意味で、インド憲法でこう呼ばれている。これらの%の出典は、Census 1991。

優遇政策¹³が適用されるOBC(Other Backward Classes=その他の後進諸階級)に属している。このOBCの人口割合は明確ではないが、人口の半数前後を占めると言われている。

その中で最多数のヤーダヴに対抗するためには、近い関係にあるカースト集団同士が結束を強めることが必要になる。コーイリーとクルミーが緊密というラブ・クーシュのキャンペーンは、州で政治力を発揮するための合従連衡の一つなのである。換言するとインドでは、議会制民主主義に伴う普通選挙制度が、カーストの在り方に大きな影響を与えているのである。

2-2. 複雑なカースト内部の事情

クルミーが別なカーストだとしても、コーイリー内部のサブカースト事情も、相当に複雑だ。筆者の調べによると、コーイリーの主要なサブカーストには、クスワーハー (Kushwaha)とダーンギー (Dangi)がある。この二つのサブカーストは、それぞれ更に上下関係にある小グループに分かれており、その中で通婚関係にあるものもないものがある¹⁴。

ダーンギーの人の一部は、自分たちはクスワーハーより上に位置し、伝統的職業は農業であって野菜作りではないと考えている。さらにダーンギーはコーイリーとは別なカーストである、という主張もある¹⁵。この主張の有力な根拠の一つは、1995年にビハール州政府が発表したOBCに属するカース

13 2008年4月の最高裁判決により、中央政府の高等教育機関では、その入学者をこれまでの指定カースト15%、指定民族7.5%に加えて、27%をOBCに割り当ててようになった。この出典は、The Times of India, 20 Apr 2008, http://timesofindia.indiatimes.com/India/Implement_OBC_quota_from_2008-09_Govt/articleshow/2966028.cms

14 ダンギー [Dangi, pp.65-66]は、ビハールのダンギーには、ダルノート(Dalnot)・ダンギー、バルキー (Barki)・ダンギー、チョートキー (Chotki)・ダンギーの三つがあるとしている。またクスワーハーのサブカーストには、ジャルハル(Jalhar)、バナーフアル(Banaphar)、アダルキー (Adarki)などがある。しかしこれらとダンギー、クスワーハーなどは全てコーイリーのサブカーストである、という人も少なくない。筆者が今回インタビューした人のほとんどが、サブカーストに関してははっきりした知識を持っていなかった。大半の人が、婚姻などの際に以前よりそうしたことを気にしなくなったので忘れてしまった、と答えている。

15 この主張は、前出のダンギー [Dangi]にまとめられている。

ト等の37の集団(classes)のリストの最後に、コーイリーとは別にダーンギーが記されていることだ。

冒頭に述べたように、カーストの区分や序列は当事者の主張や運動によって変動する¹⁶。ビハール州政府のリストの末尾にダーンギーが載っているのも、本人たちの強い働きかけを受けた結果だろうと推定される。しかし筆者が今回のフィールド調査で会ったダーンギーを含むコーイリーの人たちの大多数は、ダーンギーが別個なカーストであるという主張は極端であると捉えていた。

2-3. イスラーム教徒の野菜カースト

話をさらに混乱させるのが、コーイリーの人たちと同様に野菜に関わるイスラーム教徒のクンジュラー(Kunjra)¹⁷と呼ばれるカースト的集団の存在だ。

イスラーム教にカーストはないと考えられがちだが、インドのイスラーム教徒やキリスト教徒にカースト的な身分が存在していることは、周知の事実である。実際筆者が本調査で会ったガヤー県のイスラーム教徒のほとんどは、何らかのカースト的集団に属していた。また先にあげたビハール州政府のOBC(Other Backward Classes=その他の後進諸階級)のリストに掲載された37集団のうち、このクンジュラーを含めた6集団がイスラーム教徒であると括弧書きされている¹⁸。

あるクンジュラーの農民によると、ビハール州のイスラーム教徒のうち、

16 社会的地位を上昇させようとするこうした動きはインド各地で観察され、インドの社会人類学者シュリーニヴァース(Srinivas)によってサンスクリタイゼーション(Sanskritization)と呼ばれるようになった。

17 クンジュラーの人口は、キリスト教布教を目的としたと思われるJoshua ProjectのHPによると、ビハール州に474,000人、インドに895,000人、ネパールとバングラデシュを含めて955,000人としている(<http://www.joshuaproject.net/peopctry.php>)。同様な他のHPでは、この全体数を1,627,000人とし、ビハール州のイスラーム教徒の諸集団の中ではもっとも大きい一つとしている(<http://www.frontiers.org/Websites/frontiers/Images/profiles/kunjra.pdf>)。

18 クンジュラーは、ビハール州政府のOBCリストの26番目に「ライーンもしくはクンジュラー(Raen or Kunjara(Muslim))」と記載されている。

四分の一近くがクンジュラーで、次に多いのがアンサーリー(Ansari)、その次が序列の高いカーン(Khan)というカースト的集団に属しているとのことであった。別なクンジュラーの小学校教師は、人口約3百万人のガヤー県のイスラーム教徒は大よそ50万人で、このうち45%がクンジュラーであるとのことだった。つまりクンジュラーは、ガヤー県に集中していることが想定される。

このクンジュラーが、ヒンドゥー教からイスラーム教にかつて改宗したコーイリーたちではないかと推定するのは自然で、そう考えるヒンドゥー教徒もいる。しかし本人たちは、自分たちの名誉に関わることであるので、先祖代々イスラーム教徒であると強調する。この真偽がどうであれ、本論はこれ以降、コーイリーとクンジュラーの二つを、野菜に関わるカーストとして見ていくことにする。

3. 野菜カースト

3-1. コーイリーが生産、クンジュラーが流通

本調査で得られた印象によると、歴史的経緯のせいなのであろう、ガヤー県では一般にコーイリーの農家に比べて、クンジュラーの人たちが保有する農地面積が小さい。またクンジュラーの人たちはガヤー市などの都市周辺に居住している人が多く、野菜の流通、つまり卸売業や引き売りを含めた小売りに関わる人が多い。つまり大雑把に言うと、コーイリーが野菜を生産し、クンジュラーがそれを売っている。この違いのせいなのだろうか、クンジュラーの方がコーイリーより経済的には少し余裕があるように見える。こうした構図がよく見えるのが、ガヤー県の県都ガヤー市とブッダガヤー町の青果物の卸売市場と小売市場である。

ガヤーは、親族を失った遺族がその冥福を祈るために訪れるヒンドゥー教徒の聖地である。人口40万人近く¹⁹のこの中都市最大の食料品市場は、公設のケーダールナートマーケット(Kedarnath Market)という名前だ。

19 このガヤー市の人口推定は、1991年Censusの294,427人 (<http://qanda.encyclopedia.com/question/population-gaya-126564.html>)をもとに、最近のインドの都市人口の成長率2.4%を乗じたものを10年分乗じたものである。

この大きな市場の一角が青果物の卸売市場で、週7日間、朝5時から10時まで開いている。たくさんの人や商品で雑然とした市場には18の仲買店があり、この仲買店単位で競りが行われている。青果物は主に北インド一帯から運ばれてくるが、この調査を行った3月末に多かったブドウは、直線距離で1500キロも離れたマハーラーシュトラ州のナーシック(Nasik)からであった。

売り手は、競りが成立すればすぐに現金をこの仲買店から受け取る。この際、卸価格の6%をコミッションとして仲買店が差し引く。一方主に小売商である買い手は、商品を引き取ってすぐに売りに出す。仕入れの支払は翌日から翌々日²⁰で、コミッションとして卸価格の4%を加えて仲買店に支払う。(写真1)

聞き取りによると、この卸売市場全体の売上げは一日大よそ500万ルピー(1千万円)。仲買店が受け取るコミッションはこの10%、さらにそれを18店で除すると、一店当たり一日2.7万ルピー(5.2万円)の売上げがあると推定できる。ここから市に支払う店や倉庫の家賃、競り人や荷物を運ぶ苦力などの人件費、売上げの回収費用などを支払っている。この18の仲買店の店主の大半が、クンジュラーの人たちだ。このためなのだろう、雑然とした卸売市場の一角には、イスラーム教徒の祈りの場であるモスクが設けられていた。



写真1: ガヤー市の青果物卸売市場の競り人

このガヤー市から11キロほど南、仏陀が悟りを開いた仏教聖地ブッダガヤーは人口3万人余りの小さな町である。ここの青果物卸売市場は、町の東側を流れる川を渡った橋の袂の小さな空き地にあり、二つの小さなクンジュラーの仲買店が、ガヤー市の卸売市場と同様なシステムで商いを行っていた。(写真2)

聞き取りによると、ここに野菜を持ち込む人の大半がコーイリーの人の

20 競りにはだれでも参加できるが、顔馴染みでないものは即金払いとのことであった。

ちである。そこで会ったコーイリーの農民に野菜の販路を尋ねたところ、大半はこの市場に持込む、他にはジャガイモは冷蔵倉庫を持つ商人に自宅で直接売る場合と、地元の市場で自分で売れる場合があるとのことだった。一方この市場で野菜を競り落とす人は、クンジュラーだけでなく、他のカーストの人や、ホテルや生徒寮の食堂担当者など多彩であった。



写真2:ブッダガヤーの小さな空地の卸売り市場

ブッダガヤーの町中にある青果物小売市場は、学校の体育館ほどの広さである。その四方にはしっかりした作りの20ほどの八百屋が肩を並べて立ち並び、様々な野菜や果物を商っている。この人たちのほとんどがクンジュ



写真3:クンジュラーの八百屋にて

ラーで、店の奥をよく見るとイスラム教の絵や写真が飾られている。(写真3)

これらの店舗とは対照的に、それらの八百屋店に囲まれた真ん中の広場で、簡素な日よけの布の下で地面に直に座り込んで、女性や老人が少量小品目の野菜を売っている。この人たちの大半は、近隣に住むコーイリーの人たちである。ここの売り手に働き盛りの男性がほとんどいないのは、手間がかかる野菜栽培に専念しているためであろう。コーイリーとクンジュラーの間の経済的地位の違いは、

このブッダガヤーの小売市場を見ると一目瞭然である。

想像を逞しくすると、保有する農地面積が小さいクンジュラーの人たちは、昔はコーイリーより貧しかったがゆえに、野菜の流通にも進出したのだろう。ところが近代化の中で大きな消費都市と輸送手段が発展することで、野菜の作り手よりも売り手のほうが経済的優位に立つようになり、両者の経

済的地位が逆転したのかもしれない。

3-2. あるコーイリー農家の様子

今回現地で調査したコーイリー農民のうち、もっとも大きな営農面積を持っている農民のインタビュー²¹記録の抜粋を見てみよう。この記録から、コーイリー農家の生活の様子が窺い知れる。

インタビューの対象は、ガヤー市を西に横切る線路の北側近くの、市街化が進行中のカルクラ（Kharkhura）と呼ばれるコーイリー多住地域に住む、大農の男性である。この人を選定した理由は、ガヤーでコーイリーと言えばこの地域に集中していること、そして一年前に物故したこの父親が著名な篤農家で、前日パライヤ（Paraiya）県で情報提供してくれた二人のコーイリーが会うことを強く勧めてくれたことからである。

（以下、インタビュー記録）

（1）農地と営農状況（写真4）

- 農地は25エーカー（約10ha）。この内70%の土地は、この地区のコーイリーの人たちに刈分け小作に出し、30%（7.5エーカー＝3ha）を、農業労働者を使って自作している。
- 生産の中心は多品目の野菜中心。最近の作物は、サヤインゲン。米や小麦、とうもろこしは自家消費用にのみ作る。
- 果実：作らない。イスラーム教徒のクンジュラーが作る。
- 花卉：作らない。マーリー・カーストが作っているが、ガヤー市に花卉市場はない。
- 販売：90%は直接尋ねてくる仲買人に売る。仲買人の多くはイスラーム教徒のクンジュラーで、コーイリーは少ない。販売されたものは州都パトナー（Patna）や隣のウッタル・プラデーシュ（Uttar Pradesh）州のベナレス



写真4：灌漑路が整った大農の農地

21 このインタビューは、この人の自宅で、09年3月25日の15時から16時にかけて行われた。

- (Vanarasi)などに運ばれる。残り10%を、地元ガヤー市の卸売市場に売る。
- 種:バザールから高収量品種のものを購入。自家採種はしない。
 - 農薬:農薬も化学肥料も使っている。ナスには虫がつくので農薬は必須である。
 - 混作:しない。

(2) コーイリーについて

- コーイリーはこのカルクラ地区に隣接する地域に多く、そこでは人口の98%を占める。この地区に、コーイリーは1200世帯ほどいる。全員が農地を保有し、ほとんどが農業を営んでいる。
- この地域のコーイリーのほとんどが、ガヤー市に野菜を供給している。
- 自分たちは菜食主義者だが、それはカーストの定めではない

これほどの規模を有する野菜農家でも、流通に関わっていないことが不思議に思われる。クンジュラーを見ているので、流通からより多くの経済的な利得を得られることをよく知っているはずだ。それでも野菜生産の専門なのは、カースト的伝統なのか、それとも高度な技術と労働集約が必要な野菜生産農家の多忙さのせいであろうか。

3-3. コーイリーとクンジュラーが生産する野菜や果実の品目数の多さ

下の表は、中規模農家のコーイリーとクンジュラーが栽培している野菜、果樹、主食用穀物などの栽培品目数の一覧である。またこの二つの野菜づくりカーストが、他のカーストの農家に比べて野菜生産に特化しているか否かを比較するために、この表にはブッダガヤー周辺に住む指定カースト²²の一つであるパスワーン・カーストの四軒の中小規模農家の栽培品目数も加えた。なおこれら六軒が生産する具体的な栽培品目名を記した詳細なリストは、末尾に付表(p166～p167)として添付した。

22 指定カーストについては、脚注11を参照のこと。

ガヤー県の野菜づくりカースト農民の栽培作物種とその品目数

生産者名	S.K.	J.U.	L.P.	A.P.	S.P.	R.P.
カースト名	コーイリー	クンジュラー	パスワーン	パスワーン	パスワーン	パスワーン
営農面積	4ha	2ha	0.9-1.2ha	0.3	1.2ha	1.6ha
野菜とイモ	26	23	4	1	6	8
香辛料及び料作物	5	4	2	0	0	0
豆類	8	6	4	0	1	4
果樹	5	6	0	4 ha	2 ha	4
小合計	(44)	(39)	(10)	(1)	(7)	(16)
主食用穀物	4	3	4	2	2	3
総合計	48	42	14	3	9	19

上の表に示した6軒の農家はどれも、自家消費のために主食のコメとコムギを生産しており、この二つを含めた主食用穀物は2～4品種である。注目すべきは、このコーイリーとクンジュラーの二軒の主食用穀物以外の野菜類の栽培品目数は、どちらも40品目前後なのに対して、パスワーンの四軒は1～16品目に限られており、明らかに大きな差があることだ。サンプル数が極めて少ないので、この結果がこの地域やカースト全体の傾向を示すと主張できないが、今回のフィールド調査の結果をよく裏打ちしていることは確かである。

この二つのカーストの農家では主食用穀物の生産量は限定的で、花卉は生産していない。またこの2軒の農家では、クンジュラーの方が僅かに多くの種類の果樹を生産している。

このクンジュラーはブッダガヤーの町のすぐ近くに住み、多種多様な品目を混作(Mix Cropping)している。(写真5)

今回の調査で多くの農家の畑を見て回ったが、これほど大規模かつ多様な混作をしている例は他では見られなかった。本人は「混作は自分で勉強した」と言っており、彼の努力と才能の高さを示すものであろう。このJ.U.は、クンジュラーとしては例外的な規模を持つ篤農家と言えよう。

一方パスワーンの四軒のうち、0.3haと最も営農面積の小さなA.P.はコメとコムギとジャガイモを生産するだけである。この面積では生計を立てることは不可能なので、手間の掛らない穀物類だけにして、多くの時間を日雇労働などに費やしているのであろう。

1ヘクタールほどを耕すもう一人のパスワーンL.P.は、野菜を作らない理由として、そのために必要な元手がないことと、畑の土質が野菜には向いていないことを挙げた。彼が栽培している10品目ほどの野菜類の大半は、自家消費用と



写真5:クンジュラー・JUの混作畑

同じパスワーンで営農面積が1.6haのR.P.は、その広さから専業農家であると推察できる。そのせいか、豆類と果樹をそれぞれ四品目、さらに野菜とイモ類を8品目生産している。比較的手間のかからない豆類や果樹の品種数はコーイリーやクンジュラーに伍しているが、野菜とイモ類は三分の一以下である。またそれらを合計しても19種類で、コーイリーとクンジュラーの半分程度である。つまり生産する野菜類の品目数は、専業か兼業という要因によってだけでなく、所属するカーストによって異なっている可能性を示している。

このコーイリーとクンジュラーという園芸カーストの人たちは、親子代々野菜栽培の技術を受け継ぎ、多大な労力をその畑に注いできたことが想像できよう。

4. おわりに

前回の末尾に、ビハール州首相ニティーシュ・クマールはコーイリーという野菜づくりカーストであると誤記したことの言い訳は、これで充分であろうか？ 筆者の不勉強と、インドのカースト制の複雑怪奇さが、この過ちを招いた。

今回のフィールド調査のおかげで、この問題をある程度克服できたが、ま

だ勉強不足という気もしている。例えば、コーイリーがいつ頃からどのような理由で野菜生産に専念するようになったのかという点は、まだ解明できていない。

もう一つ注意を要することは、本文に記述したことが共通する地理的範囲である。本論冒頭に述べたように、カーストは地域によっても大きく異なり、その地域の範囲もカースト等によって異なっている。本論は、文献やHP、そしてビハール州南部に位置するガヤー県で2009年3月末に行ったフィールドでの調査の結果に基づくものである。それゆえこうした事実が、ガヤー県を超えてビハール州や南隣のジャールカンド州、西隣のウッタル・プラデーシュ州のどの辺まで共通するか、ということは確かめられていない。

いずれにせよ、多様な生業や農作物で生計を立てる「百姓」が農村社会で長らく主流を占めてきた日本で暮らす私達にとって、インドでは主に主食用穀物類を生産する農民とは別に、野菜や花卉の生産に特化した園芸カースト的な集団が伝統的に存在していることは、驚きに値する。カースト制は消えつつある過去の遺物だ、遅れたインドの象徴だと言った理解は、西欧近代化に影響された私達の浅薄さを示すものである。

本論はカースト制の是非を検討するものではないが、カースト制が人間の本質のどこかに根ざしているものであるからこそ今日まで続いていること、そしてインド亜大陸では今日でも形を変えながらも強固に存在していることは強く指摘したい。カースト制を他山の石とせず、私達が自分たち自身を振り返ること、同時にそこから教訓を学びとることが重要である。(写真6)

さてこの「南アジアの園芸に関わる諸カースト巡り」シリーズ、今回は花の栽培や造園、花卉加工やその販売などを生業するマリーー(Mali)・カーストを取り上げる予定である。このカーストのサブカーストは多種多様で、その分布はビハール州をはるかに越えてインド各地に



写真6:路上の八百屋の品々

広がり、歴史的に著名な人物を輩出し、資料もこれまでより多い。そのため、相当しっかりした調査をしなければならないと覚悟している。

参考文献:

大橋正明、インド・ビハール州のパーシーの人々とヤシ酒(ターリー)、そしてマフアー酒、園芸文化 No. 5 所収、2008、恵泉女学園大学園芸文化研究所

大橋正明、「不可触民」と教育:インド・ガンディー主義の農地改革とブイヤーンの人びと、2001、明石書店

西岡直樹、「サラソウジュの木の下で インド植物ものがたり」、2003、平凡社、

Dangi, Mahendra Singh、ダーンギーの社会と文学 (Dangi Samaji Evan Sahitya)、2005、出版社不明
(ヒンディー語)

Sewak, Ram、ビハールの歴史 (History of Bihar - Between Two World Wars 1919-1939)、1985、Inter-India Publications, New Delhi

付表 インド・ビハール州・ガヤー県の野菜づくりカースト農民が栽培する作物の品目名と品目数

	日本語	英語	生産者名 村名	S.K. Rathigha コーイリー 管轄面積 (概算)	J.U. Bhagalpur 2 ha = 5 acres	L.P. Bakror 0.9-1.2ha = 3-4 igha	A.P. Bakror 0.3ha = 1 bigha	S.P. Bakror 1.2ha = 4 bigha	R.P. Bakror 1.6ha = 4 acres
野菜とイモ類 Vegetable & tuber									
1	タマネギ	onion	pyaj	○	○	○	×	×	×
2	ジャガイモ	potato	alu	○	△ (自給用)	○	○	○	○
3	ニンジン	carrot	gajar	○	○	×	×	×	×
4	ホウレンソウ	spinach	palak	○	○	○	×	○	○
5	ダイコン	radish	mulii	○	○	○	×	×	○
6	カリフラワー	cauliflower	ful gobi	○	○	×	×	×	×
7	キャベツ	cabbage	band gobi	○	○	×	×	×	×
8	トマト	tomato	tomater	○	○	○	×	○	○
9	コリアンダー	coriander	dhanya	○	○	×	×	×	×
10	ナス	eggplant	baigan	○	○	○	×	○	○
11	オクラ	okra	bhindi	○	○	×	×	○	○
12	ニガウリ	bitter melon	karala	○	○	×	×	×	×
13	キュウリ (北インドに多い)	cucumber	khira	○	○	×	×	×	×
14	キュウリ (日本のものに類似)	cucumber	Kakri	○	○	×	×	×	×
15	ヒヨウタン	bottle gourd	Kaddu	○	○	×	×	×	○
16	トウガン	wax gourd or ash gourd	Bhura	○	○	×	×	×	×
17	スイカ	water melon	turbaz	○	×	×	×	×	×
18	イトワリ / トカトヘチマ	angled luffa or ligde gourd	jinagi	○	○	×	×	×	○
19	カラスウリ	pointed gourd	patar/pawal	○	○	×	×	○	×
20	サツマイモ	sweet potato	sakurkand	○ (少量)	○	×	×	×	×
21	イヌホオズキ	black nightshade	makoi	×	○	×	×	×	×
22	カボチャ	pumpkin	kolra	○	×	×	×	×	×
23	チーフルビート	red beat	chukandar	×	×	×	×	×	×
24	キャッサバ	cassava	nata alu	○	×	×	×	×	×
25	ソラコンニャク	elephant foot yam	ool/suran	○	○	×	×	×	×
26	タロイモ	Taro	Karechu	○	×	×	×	×	×
27	カシエウイモ	aerial yam	kandh	○	×	×	×	×	×
28	ワサビノキ	drumstick	Munga	○	○	×	×	×	×
			栽培品目数	26	23	4	1	6	8

香辛料及び油料作物 Spice & oil seed									
29	カウシンナ	indian mustard							
30	ニンニク	garlic							
31	シヨウガ	ginger							
32	ウコン	turmeric							
33	トウガラシ	green&red pepper							
Legume									
34	ヒヨコマメ	chick pea							
35	リョクトウ	green bean							
36	キマメ	pigeon pea							
37	モスビーン	moli bean							
38	ササゲマメ	black-eyed pea or cow pea							
39	グリーンピース	garden peas							
40	サヤエンドウ	french bean or snap bean							
41	レンズマメ	lentil							
Fruit									
42	マンゴー	mango							
43	グアバ	guava							
44	パパイヤ	papaya							
45	ジャックフルーツ	jack fruit							
46	レモン	lemon							
47	ポンカン	mandarin orange							
48	ネーブルオレンジ	sweet orange							
49	ベンガルカタチ	stone apple							
Main cereal									
50	米	rice							
51	小麦	wheat							
52	トウモロコシ	corn							
53	シコクビエ	finger millet							
栽培品目数									
			栽培品目数	4	3	4	2	2	3
			栽培品目数合計	48	42	14	3	9	19

筆者が09年3月のフィールド調査で作成した。しかし筆者の能力不足のために、野家の現地名（現地口語のヒンディー語もしくはマグディー語）が正確か/不正確なもの、それによって英語や日本語との同定が正確及び確定のものが含まれる。困難な同定には、本学の藤田雅毅教授と小体雅毅教授、コルカタ在住のNGO活動家で農業専門のオルテンドゥー・チャタジー氏（Mr. Arthendu Chatterjee）の示唆、西園直樹著「サラソウジュの木の下で インド植物ものがたり」（平凡社、03年）、及び多数のHPを参考にした。